

# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 7 NO. 4

(通巻 28号)

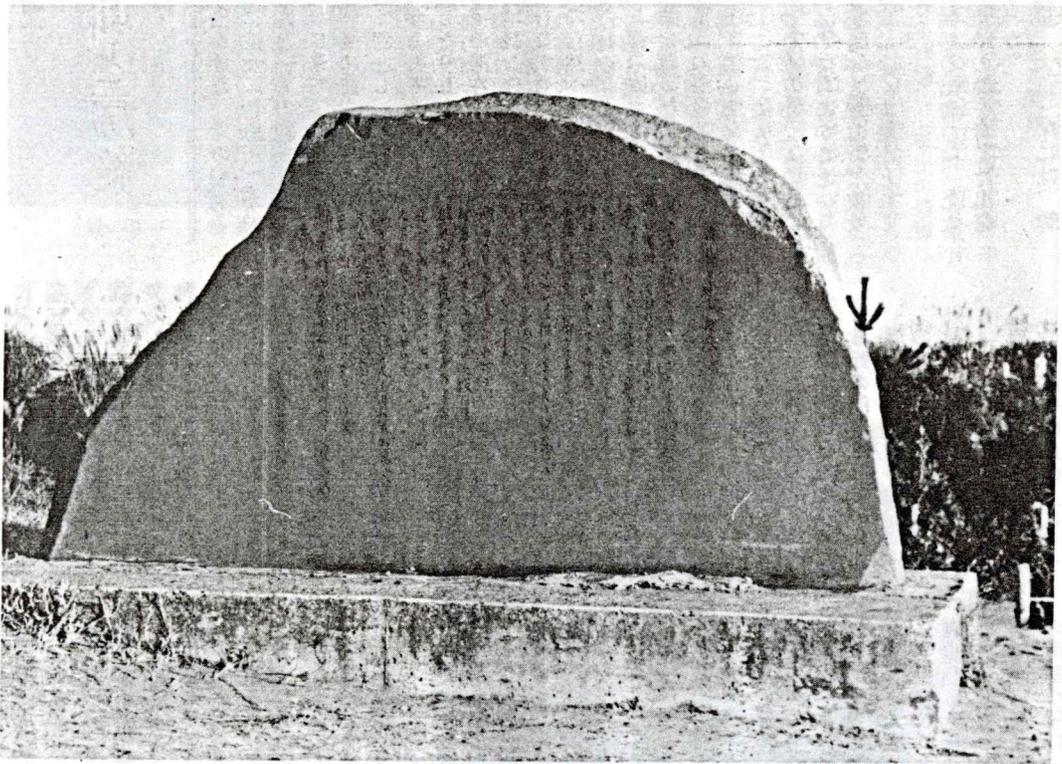
昭和55年12月1日発行

編集・発行人 高橋 在久

千葉県立  
55.12.-3  
美術館

〒267 千葉市中央港1丁目10番1号

☎ 0472-42-8311 (代表)



千鳥と遊ぶ智恵子 (九十九里真亀所在の碑より)

## 美の根

本年三月に待望の県民アトリエが完成し、県民の参加する文化活動としての「みる・かたる・つくる」活動が力強く歩み出すことができた。県民アトリエでは、美術に対する体験と理解が事業の中心となっている。

前者の実技講座は、彫塑入門講座をはじめ、デッサン・洋画基礎・洋画研修・てん刻・書芸の各講座を開講した。講師には、県美術会長の浅見喜舟氏をはじめ、各界の第一人者に願った。三倍強の応募者から抽選で決定した受講者は三十名ずつであった。後期は、さらに陶芸と七宝焼講座が加わり、一段と活況を呈している。

後者は、「講演会」や「語る会」等を開催している。講演会は田中稔氏による「近代美術の原風景」をはじめ、細野正信氏の「夢二の魅力」を行い、一月には北川太一氏による「光太郎と芸術」を予定している。語る会は、既に、松尾敏男氏、深沢幸雄氏、夢二会の方々からの話題をもとに行ってきた。夏季大学についても約百十名の受講生が、日本洋画史の流れについて学習していた。また、情報資料室は図書閲覧の場として利用されているが、調査研究の相談にも応じられるよう準備を進めている。

特別展 「高村光太郎、その芸術」

光太郎と房総

彫刻家高村光太郎は、世に詩人として名高い。しかし、光太郎の活動は、本来の彫刻ばかりではなく、絵画・書・文学(詩・翻訳)・評論とその幅は広い。今回の展覧会ではその芸術を回顧するが、同時に本県で始めて開催するに当り、房総とのかかわりについては展覧する予定である。

そこで、光太郎と房総の地とのかかわりについてふれてみたい。

**銚子** 銚子は、光太郎と智恵子が再会した場所として重要な所である。明治四十四年、柳八重子(柳敬助夫人)により紹介された二人は、翌四十五年、光太郎が犬吠に写生に行つた際、偶然に出会つている。この時のことについて、後年光太郎は「智恵子の半生」の中で、次のように記している。

ちょうど明治天皇様崩御の後、私は犬吠へ写生

に出かけた。その特別の宿に彼女(智恵子)が妹さんと一人の親友といっしょに来ていてまた会つた。後に彼女は私の宿へ来て滞在し、いっしょに散歩したり食事したり写生したりした。(中略)この宿の滞在中に見た彼女の清純な態度と、無欲な素朴な気質と、限りなきその自然への愛とに強く打たれた。君が浜の浜防風を喜ぶ彼女はまったく子供であつた。しかしまた私は入浴の時、隣の風呂場に居る彼女を偶然に目にし、なんだか運命のつながりが二人の間にあるのではないかという予感をふと感じた。彼女は実によく均整がとれて

いた。

この偶然の出会い、光太郎と智恵子の愛を育てた出発点となつた。

九十九里 大正三年には、智

恵子と結婚。これより光太郎にとつて、愛による喜びと希望に満ち、彫刻制作の活動をさかんに行い、数々の秀作を創み出す時期がつづいた。しかし、昭和七年、智恵子の精神に異常な徴候があらわれ、アダリン自殺未遂をする。病状は一進一退し、昭和九年には智恵子は、実妹が住む九十九里へ療養のため移り住む。光太郎は、毎週九十九里まで見舞に出かける。この時のことについて「九十九里浜の初夏」という一文を書き残している。

私は昭和九年五月から十二月末まで、毎週一度づつ九十九里浜の真亀納屋といふ小さな部落に東京から通つた。頭を悪くしてゐる妻を其処に住む親類の寓居にあづけて置いたので、その妻を見舞ふために通つたのである。真亀といふ部落は、海水浴場としても知られてゐる鰯の漁場千葉県山武郡片貝村の南方一里足らずの浜辺に沿つた淋しい漁村である。(中略)

妻の逗留してゐる親戚の家は、此の防風林の中の小高い砂丘の上に立つ

てゐて、座敷の前は一望の砂浜となり、二三の小さな漁家の屋敷が点々としてゐるさきに九十九里浜の波打際が白く見え、まっ青な太平洋が土手のやうに高くつづいて際涯の無い水平線が風景を両断する。(中略)

松の花粉の飛ぶ壯觀を私は此の九十九里浜の初夏にはじめて見た。(中略)妻の浴衣の肩につもつたその花粉を軽くはたいて私は立ち上る。妻は足もとの砂を掘つてしきりに松露の玉をあつめてゐる。日が傾くにつれて海鳴りが強くなる。千鳥がつひそそを駆けるやうに歩いてゐる。

この情景を主題にして、後に「千鳥と遊ぶ智恵子」風になる智恵子」など幾篇かの詩を読み、現在、九十九里センターの裏に「千鳥と遊ぶ智恵子」の詩を刻んだ碑が建てられてゐる。

三里塚 光太郎は、たびたび三里塚を訪れた。これは、明治三十三年頃、与謝野鉄幹の新詩社で知り合つた水野葉舟が、大正十三年遠山村駒井野の開墾小屋に一人住いをして

いたので、この葉舟と会うためであつた。大正十三年訪れた光太郎は、「春駒」と題する詩を詠んでゐる。この詩は昭和五十二年その原稿を刻し、碑が建立されてゐる。

この他、光太郎と交友のあつた房総ゆかりの人としては、銚子に生まれ画家であり詩人であつた宮崎文二、君津の生まれで中村屋グループの一人としても名高い画家柳敬助などが上げられる。この二人についても、先の水野葉舟と共に展覧会では、その作品を紹介することになつてゐる。

会期・入場料

●会期

昭和56年1月6日(火)〜2月6日(金)

開館時間は、午前9時〜午後4時30分 月曜日休館

●入場料

大人三〇〇円(二〇〇円)

大・高生二〇〇円(一〇〇円)

中・小生一〇〇円(五〇円)

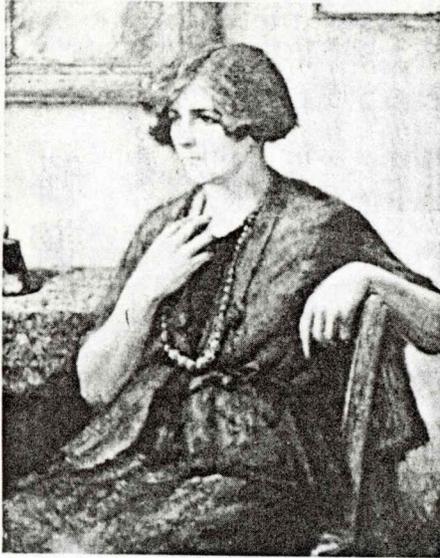
(一)内は二十名以上の団体料金

なお、学校団体については、特別の割引制度がある。

企画展

昭和55年度

第2期 常設収蔵作品展



「緑のスウェーター」 霜鳥之彦

常設展の開設

本館の収蔵作品展は常時開催し、随時、収蔵作品を鑑賞できる状態にし県民の皆様へのサービスとしたいところではある。しかし現在のところ第一期、第二期とし、この間諸団体の展覧会、特別展と併行しまたは区切りされて行っているのが現状である。本館では、日本美術における近代以降の房総にゆかりのある美術家の調査・研究をすすめ、その作品収蔵を図っている。

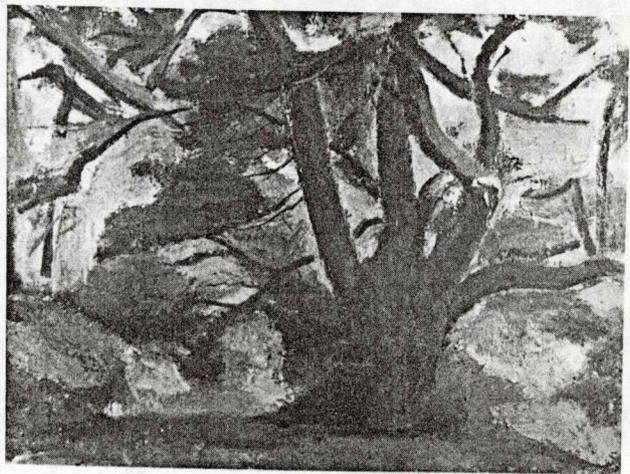
第二期収蔵作品展

本年三月二十七日から九月

七日までを第一期とし、十二月五日(金)から明年三月三十一日(火)までを期間として第二期常設収蔵作品展は開催されることとなった。

展示される作者

井忠・都 鳥英喜・澤部清五郎・原勝郎・板倉鼎等、日本画、東山魁夷・富取風堂・小野具定等、書、浅見喜舟・小暮青風等、版画、浜口陽三・星裏一・深



「森A」原 勝郎

カナダ現代版画10人展

カナダの版画熱

現在、カナダでは版画がもつとも人気のある美術といわれるほど、かつてない活況を呈している。

これは、版画の技術が多種多様な表現の可能性をもってあり、プロセスの妙味、創造性、主観性が広大な国土の上

に、壮大な自然と、多様な社会の中に生きるカナダ人の氣質にマッチし、今日の隆盛をもたらしたものと考えられる。このたび、カナダの第一期で活躍している十氏の作品約五十点を展覧し版画の美を鑑賞していただき、日本ではあまりなじみのないカナダの美術を紹介するものである。

十人の作家

現在カナダの第一線で活躍している版画家は、エド・パトラム、パット・マーチン・ベイツ、デレク・ミッチェル・ベサント、ルネ・デルアン、ジェニファー・ディクソン、ウエイン・イーストコット、ウォルター・ジュール、ガストン・プチ、ノボルサワイ・ピエール・テトロロ等である。

彼等十人の作家の作品から各五点を集め、特別展「高村光太郎、その芸術」と一部開催期間が重なる予定である。なお開期は一月十三日(火)から、一月二十五日(日)まで。また、この企画展「カナダ版画10人展」においては入場料は無料である。

—— ボランティア活動を ——

# 解説員の養成

## ボランティアの要望

「支えあい、たすけあい」の気持ちで身につけた人たちが近年多くなっている。どんな人でも他人に役立つものを持っており、人それぞれに支えあいが可能であることをよく認識した人たちが、積極的にボランティア活動をするようになってきた。特に婦人層の進出が目立ち、活動分野も狭い意味での福祉にとどまらず、教育、文化・生活環境の分野にまでわたっている。

本県では、文化庁より「文化財愛護活動推進方策研究」の委嘱を受け、地域や社会の変化を乗り越えて文化財を伝承し、豊かな文化生活を作り上げる方策を探究し、それを推進することになった。その一環として、美術館等におけるボランティア活動がとりあげられた。この活動を組織的に行うための諸問題を研究協議するために、千葉県文化財愛護活動推進方策研究協議会が設置された。

なお、本年度の協議会委員

は左記の通りである。

鈴木民三 県立美術館友の会 会長

大里 功 県立美術館友の会 理事・事務局長

野口貞子 千葉市婦人グループ 連絡会役員

福田襄州 県美術館常任理事 事務局長

下津谷 達男 野田市郷土博物館 長

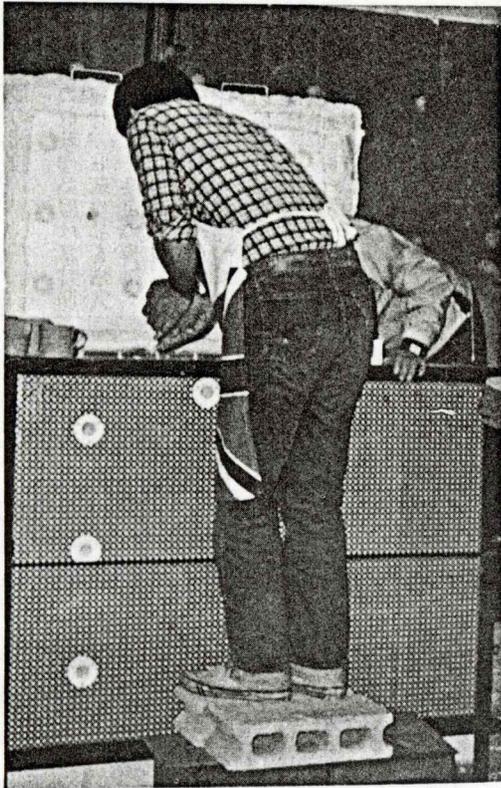
齋藤 浩 県教育庁文化課長

江沢 一夫 県教育庁社会教育

課成人教育係長  
高橋在久 県立美術館長  
(順不同 敬称略)

## ボランティアの募集

美術館では、ボランティア活動を推進するために、美術館友の会々員の中からボランティアの募集を始めた。本館主催の展覧会の際に参観者に作品の解説をしたり、館内のガイドや各地の展覧会の情報提供等が主な仕事である。それらの活動をする解説員を養成するために、一定の期間美術に関する基礎的な知識としての美術史と、美術資料の調査方法についての講座や話し方講座等を行う計画である。



でき上った電気窯の初焼

## 陶芸学習の場・窯場に

# 陶芸用電気窯を設置

県民アトリエの、陶芸学習の場である窯場に、このほど陶芸用電気窯が設置された。本館では、すでにこの機会を待たして「陶芸入門講座」を計画していたが、この応募者は一

二八人であった。しかしこの要望には応えきれず、残念ながら参加者は三十人となった。第一日目は、十月三十一日(金)から開かれ講師の山本正年氏、土肥満氏より、陶芸をはじめめる際の心構え、焼き方、釉薬、土の練り方等、陶芸の基本的なことについての講話があった。途中、ちょうど本館で開催されていた県展の工芸の作品を実際に見ながら、いろいろ解説された。

そして、第二日目より実技にはいり、講師の指導を受けながら、それぞれ受講生は制作に取り組み、二日間の実習で、コーヒーカーップ、皿、茶わんなど趣向をこらして作り上げていった。

素焼は講師の土肥氏と受講生の有志の方々によって行われた。

本講座の今後の予定は、十一月二十九日(土)に釉薬をかけて本焼きを行い、最終日の十二月二日(火)に合評会を行って全日程を終了する。

この館報がみなさんのお手元に届く頃には、立派な作品が並び、受講生の方々の喜びの声が聞かれることと思えます。

# 特別展 抒情の旅路 竹久夢二展を終えて



会場風景

本年度第二回目の特別展として「抒情の旅路」竹久夢二展を九月十三日から十月十五日までサンケイ新聞社・千葉サンケイ新聞社と共催した。開館日数は二十八日で、入館者数は二一、三〇〇人となり、盛況を極めた。

本展では、夢二の業績を多面的にとらえる中で、夢二についての新たな認識とその芸術性の再評価を目指した。

展示資料は、日本画、油絵、水彩画、版画、装画、挿絵、図案、スケッチ、書簡、著書など多分野にわたり、総点数は五六〇点にものぼった。今までに夢二展は他の会場でも

幾度か行われているが、これほどの規模、内容は希有のことであったと思われる。

展示会場は、第一、二、三展示室を使用し、第一、二展示室は「黒船屋」「椿乙女」「丘の上の少女」といった日本画、油絵、水彩画などの肉筆を中心とした作品を展示した。第三展示室には「セノオ楽譜」「婦人グラフ」「児童画」などの装画、挿絵の印刷を媒介とした作品コーナーを広くとり全体の構成として、夢二芸術の多様性、特質が理解されるように工夫した。

また、本展に関連し、講演会「夢二の魅力」を東京国立博物館学芸部美術課主任研究官の細野正信氏、さらには、美術を語る会「夢二の世界を語る」を御子息の竹久不二彦氏をはじめ、夢二会の高相利郎氏、澤田城子氏にお願いした。これにも多数の方々参加を得た。質疑応答が活発に行われ、夢二の理解を深めていただく恰好の機会となった。

本展開催中には、夢二に関

## 情報資料室から

九月九日開設以来十月末までに百人の人たちの利用があった。資料についてはまだ不十分な点が多々あると思うが、遠慮なくお尋ね願いたい。次に資料の寄贈があったので御紹介する。

千葉市在住の鈴木満平氏より、展覧会図録千冊を頂戴した。新聞にも掲載された

ので御存知の方もあるかと思うが、昭和三十一年から二十四年間にわたり、コッポツと一冊一冊足を運んで買集められたものである。図録は図書とちがい古いものは入手が不可能になる。しかも美術館資料としては大変貴重である。

明年度からの利用を期して整理を進めている。

連する情報を幾度か寄せられた。中でも、ドイツで発見された夢二作品「水竹居」が持ち込まれ、途中展示で会場に光彩を添えたことは大きな話題の一つであった。

一般的には抒情的な美人画家として知られる夢二であるが、本展を開催したことにより、多くの方々に、夢二の仕事の幅広さを改めて知っていただけたようである。そして、夢二の日本美術史上で果たした役割がいかなるものであったかを再発見していただけたのではないかと思われる。

## 第五回葉美会展

千葉県立美術館友の会の略称が葉美会である。したがって

て回を重ねた葉美会展は、友の会々員だけが出品できる(ただ今では絵画のみであるが)展覧会である。

昨年を例にとれば一三六点の出品を数えた。本年は発足から数えて第五回、友の会洋画実技講座担当であられた千葉大学の武内和夫先生、船橋高校の根岸茂行先生、千葉市立高校の高橋規矩治郎先生方のご指導を受けて励んだ成果を世に問う絶好のチャンスともいえるであろう。

また会員として趣味を生かし研鑽を積まれた方々の出品も大歓迎である。左記を参照されて奮ってご出品くださるようお願いする次第である。

一、会期 56・1・6～18

二、申込日 55・12・10  
三、搬入日 55・12・26  
四、批評会 56・1・18  
講師 千葉大学武内先生  
くわしくは友の会々報「し  
おさい」No26を参照ください。  
(12月2月)

## 団体展

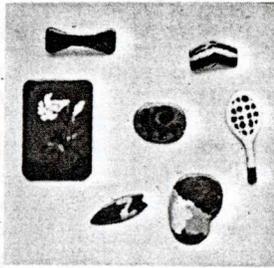
(一部既報)

- ▽第30回千葉デザイン展 12・2～12・7 無料
- ▽千葉県立大学連盟美術展 12・2～12・7 無料
- ▽概念と空間展 12・2～12・7 無料
- ▽第25回子ども県展 12・9～12・21 無料
- ▽登龍社・宮坂会書初展 1・6～1・11 無料
- ▽葉美会展 1・6～1・18 無料
- ▽親子絵画展 1・13～1・18 無料
- ▽第5回日輝展選抜展 1・20～1・25 無料
- ▽子ども造形展 1・27～2・1 無料
- ▽千葉県小・中・高書初展 2・3～2・8 無料
- ▽第6回千葉県民写真展 2・3～2・15 無料
- ▽千葉大美術科・書道科制作展 2・10～2・15 無料

# 各種講座あんなない

○七宝焼入門講座  
美術館では、館主催による後期の七宝焼入門講座の募集を行っている。

七宝焼とは、七宝を散りばめたような美しい焼物の意で、銀や銅などの面にくぼみをつくり、そこに酸化鉛、酸化コバルトなどを含む種々の色のエナメルを埋め熱して熔着させ、花鳥、人物などの種々の模様をあらわし出したもので、古代中国の秦漢時代からあり、わが国でも奈良・平安時代に作られ今に至っている。



前回の七宝焼講座受講生作品

今回も、初心者を対象としてペンダントやブローチなどのアクセサリー、室内装飾品などの制作技法の習得を通して、手づくりの楽しさ、使う喜びを味わう講座です。

・期日 2月27日(金)～28日(土)

・時間 午前10時～午後4時  
・講師 長南光男氏(千葉大 学教授)

・募集人員 30名(応募者多数のときは抽選で決定)  
・経費 材料費自己負担(千円程度)

・締切 2月13日(金)  
○てん刻入門講座

てん刻とは、木や石などの印材にてん書体で文字を刻すること、本来はそれを印肉で紙に押ししたもの、鑑賞する。しかし、この技法そのものは実用的なものとして蔵書印・落款印などにも応用することができ活用する場は多い。

今回は、てん刻の技法や材料を知り、彫る喜び、使う楽しさを味わう初心者向けの講座

\*\*\*\*\*

## 後期各講座すすむ

去る十月十九日(日)に第二期の「彫塑制作講座」、十一月十六日(日)に第三期の「デッサン入門講座」が終了した。

後期も前期と同様、首像の制作で、講師は青木三四郎氏であった。また、「デッサン入門講座」は、三期とも篠崎輝

座である。なお前回まで受講された方はご遠慮願いたい。

・期日 3月28日(土)～29日(日)  
・時間 午前10時～午後4時  
・講師 古川悟氏(日展審査員)

・募集人員 30名(応募者多数のときは抽選で決定)  
・経費 材料費自己負担(二千五百円程度)

・締切 2月16日(月)  
※申し込み 往復はがきに講座名、住所、氏名、電話番号を記入し、美術館研修宛送付ください。

## 年末・年始休館日

年末休館日 12月26日(金)から12月31日(水)まで。  
年始休館日 1月1日(木)から1月4日(日)まで。

夫氏を講師に各二日間石膏デッサンの学習をした。

## 講演会等

1月15日(祝)午後2時から美術講演会「高村光太郎、その芸術」講師・北川太一氏  
1月25日(日)午後2時から美術を語る会「光太郎と房総」話題提供・中村傳三郎氏、鳥海宗一郎氏

## 来館者

8月	25 山口県立美術館員二名
9月	27 福岡県文化会館美術館員一名
10月	2 新潟県教育委員会社会教育課員二名 14 浜松市美術館員一名 28 岐阜県美術館開設準備室員二名 30 宮城県総務部財政課員二名
11月	2 鹿児島市教育委員会社会教育課員一名 6 沼田武副知事来館 21 神奈川県文教委員来館二十名
8月	日記抄
9月	30 てん刻入門講座(二期)開講 10 デッサン入門講座(二期)開講 13 特別展「竹久夢二展」始まる。10月15日まで。 15 美術講演会 講師 細野正信氏 27 美術を語る会 話題提供 夢二会
10月	1 彫塑制作講座(二期)開講 8 移動美術館始まる。11月9日まで。 1 「陶芸入門講座」始まる。
11月	8 デッサン入門講座始まる。 10 美術館資料審査委員会 12 県博協第二回研究会

## 編集後記

◇…本年度は、特別展二、画展二を無事終了し、県民アトリエの各種講座も順調に進行し、年末となった。皆様の御支援を深く感謝するところ

である。  
◇…館内は、新年明け早々に特別展、さらに一月十三日から企画展を目指し進行中である。  
◇…迎える年を皆様と共に、さらに躍進を望み、行く年を静かに省みたい。